



「俊蔭上」藤原氏の若小君（後の兼雅）と俊蔭の娘の逢瀬

横3.3cmの無枠題籤に、上から半分までに「うつほ物語」、半分からは二行書きで、上段右側に巻名、上段左側は空白、下段右側に枠付きで今板本の文字と巻順、下段左側に古本の文字と巻順が印刷される。内題はない。表紙は、紺色の無地厚紙で楮紙。表紙に虫つくろいが行なわれた形跡がある。装丁は大四半本で五つ穴の袋綴。料紙は楮紙打紙で、美本である。版式は単辺（縦20.0cm×横16.0cm）、無界で半葉十一行。句点を付す。本文は漢字仮名交じり。書入は、漢字・仮名・片仮名を、墨・朱墨・藍墨で記す。また、当該本には、「俊蔭上・下」巻、「藤原の君」巻、「忠こそ」巻、「梅の花笠」巻の五冊にのみ書入れがあり、「俊蔭上・下」二冊の最後に、田中道麻呂、平春海、源弘綱の名前が見える。これは、田中道麻呂、村田春海、佐々木弘綱の書入れを書写したということである。当該本の書入れは、本に直書きしたものと付箋で貼ったものの二種類があり、付箋で貼ったものは、三人の国学者の書入れを書写した人物だと考えられる。このことから、当該本の書き入れは、近世末期から近代初期のものであろうと推測できる。

（日本語日本文学科非常勤講師 武藤那賀子）

うつほ物語 絵入版本

日本語日本文学科蔵
文化3年(1806)
全30冊
縦26.5cm 横18.5cm

『うつほ物語』は、現存最古(10世紀)の長編物語である。琴の物語だといわれることが多いが、それだけではなく、前半には二十名近くの男性から求婚されるあて宮求婚譚があり、後半には源氏と藤原氏の立太子をめぐる政治争いがある。『うつほ物語』には善本がなく、巻序が乱れていたが、延宝5年(1677)になって、整板本全巻三十冊が刊行され、初めて全巻を読むようになった。これはかなり売れたらしく、百余年後の文化3年(1806)に延宝5年開板本の補刻本が出版された。

今回公開されるのはこの文化3年補刻本である。刊行時には巻序は整理されていたものの、本文にはいまだ読みにくい箇所が残っていた。そのために本居宣長をはじめとした近世の国学者が版本に注を書き入れた。

当該本の書誌情報は以下の通りである。外題は、表紙左肩に縦19.9cm×横3.3cmの無枠題籤に、上から半分までに「うつほ物語」、半分からは二行書きで、上段右側に巻名、上段左側は空白、下段右側に枠付きで今板本の文字と巻順、下段左側に古本の文字と巻順が印刷される。内題はない。表紙は、紺色の無地厚紙で楮紙。表紙に虫つくろいが行なわれた形跡がある。装丁は大四半本で五つ穴の袋綴。料紙は楮紙打紙で、美本である。版式は単辺（縦20.0cm×横16.0cm）、無界で半葉十一行。句点を付す。本文は漢字仮名交じり。書入は、漢字・仮名・片仮名を、墨・朱墨・藍墨で記す。また、当該本には、「俊蔭上・下」巻、「藤原の君」巻、「忠こそ」巻、「梅の花笠」巻の五冊にのみ書入れがあり、「俊蔭上・下」二冊の最後に、田中道麻呂、平春海、源弘綱の名前が見える。これは、田中道麻呂、村田春海、佐々木弘綱の書入れを書写したということである。当該本の書入れは、本に直書きしたものと付箋で貼ったものの二種類があり、付箋で貼ったものは、三人の国学者の書入れを書写した人物だと考えられる。このことから、当該本の書き入れは、近世末期から近代初期のものであろうと推測できる。

（日本語日本文学科非常勤講師 武藤那賀子）



桜地流水文蒔絵双六盤

学芸員課程蔵
江戸時代
縦27.8cm 横40.0cm 高19.5cm

双六の名前は、一から六までの数を表す点が刻まれたさいころ二つを振ってコマを進める遊び方に基づいている。双六には、出た目に応じて、紙面上の振り出しから上がりまで駒を進める絵双六と、木製の盤面上の区画にコマを進める盤双六とがある。ここで紹介する盤双六の歴史は古く、奈良の正倉院にも聖武天皇ゆかりの宝物が伝えられている。双六は、広く人々に楽しまれたが、『平家物語』巻一に、白河

法皇が「賀茂河の水、双六の養、山法師、是ぞわが心になわぬもの」と嘆じた逸話が伝えられるように、盤双六の遊び方は、さいころの目の偶然性によるもので、賭け事的な側面をも持ちあわせたため、度々禁じられた。平安時代中期に成立した『うつほ物語』の「藤原の君」の帖でも、ばくち打ちが「双六の主」として記されている。

江戸時代、双六盤は将棋盤・碁盤と並んで婚礼調度の一つとされ、蒔絵を施した華やかな双六盤が大名調度として各地に伝えられている。桜材を内割りしたこの双六盤は、盤面に設けられた区画と梅鉢文を象牙の象嵌で表し、側面には流水に浪蕩・葵・楓文、左右に刳られた笠形の手掛かりには尾長亀の吉祥文が華やかに蒔絵されている。盤面と共に、二つのさいころ、さいころを振り出すための竹製の双六筒、唐木と象牙で作られた黑白各十五個の双六子が錦の袋に納められて伴っている。

盤双六の遊び方には、「折り葉」・「追回し」・「つみかえ」・「本双六」などがあつた。この双六盤上でも白熱した遊びが展開されたのであろうか、盤面には無数に弧状の打突痕が確認され、その弧が双六筒の円周と一致し、サイコロを籠めた双六筒を強く盤面に打ち付けて振り出していた様子がうかがえる。

（EF共同研究員 田中 潤）

平家公達草紙

哲学科蔵
江戸時代末期～明治時代
縦29.0cm 全長292.3cm



挿図1 「平家公達草紙」部分 哲学科蔵

「平家公達草紙」は、平安末期に栄華を極めた平家一門の宮廷生活の一部を描いた白描の絵巻である。内容の異なる作例が複数現存しており、A. 福岡市美術館松永コレクション本、B. 東京国立博物館本・金刀比羅宮本・早稲田大学図書館本・國學院大學図書館本、C. 宮内庁書陵部本など、現在三つの系統が確認されている。白描の小絵巻が流行した南北朝期頃の制作と考えられるが、『平家物語』を典拠としているわけではなく、また、上記の作例の殆どが江戸時代以降の模本であるため、原本の全容は明らかではない。基本的に詞書とそれに対応する絵とで構成されているものの、詞書のみ作例もいくつか存在する。

哲学科蔵「平家公達草紙」(以下、本巻)は、まくりの白描絵巻で、「かたのまもり」「建春門院の面影」「重衡とその想い人達」の段の絵三図で構成されており、詞書はない。これらはすべてB系統の作例に見られる場面であるが、天保3年(1832)に狩野養信(1796～1846)が模写したという同じB系統の東京国立博物館本に比べると、未完成な部分が多い。しかしながら、巻末に位置する「重衡とその想い人達」(挿図1)に関しては、強弱のある墨線で丁寧な描かれている点に注目される。この場面は、寿永2年(1183)平家都落ちの際に、平家一門の中でも美男とうたわれた重衡が、親しくしていた女房達へ暇乞いに参るといふ悲しい恋の別れを絵画化したもので、鎧姿の重衡が御簾越しに別れを告げる様子が描かれている。東京国立博物館本



挿図2 「平家公達草紙」部分 東京国立博物館蔵
image:TNM Image Archives

の同場面(挿図2)と比べると、重衡の直垂や女房達の袴が淡い朱色で着彩されており、また、モチーフの描き方も多少異なっている。

ところで、本巻の表紙には「平家物語 冷泉為恭画」と記されている。冷泉為恭(1823～1864)は幕末期の復古やまと絵派の絵師で、数多くの古絵巻・古画を模写しており、香川県・金刀比羅宮蔵「平家公達草紙」は為恭自身の模写本として知られている。また、早稲田大学図書館本は、西田直養(1793～1865)が為恭から借りた「平家公達草紙」を模写したものだといふ。直養が借りたものが、為恭筆本であるかは定かではないものの、為恭は「平家公達草紙」を所持し、自身も模写を行っていたのである。本巻の絵師については、今後、金刀比羅宮本とも比較しながら検討する必要があるだろう。

なお、本巻見返しには明治期の日本画家・和田貫水(1867～1945)の蔵書印が押されていることから、彼の旧蔵品であったことが窺える。貫水は明治30年(1897)に春日右方絵所預に任ぜられた絵師で、やまと絵を守る貫魚(1809～1892)などに学んでいる。

(助教 柳澤恵理子)